

新宿
岩槻

 2026 年 1 月 27 日開催
2026 年 1 月 29 日開催
目白大学学生評価委員会

2025（令和7）年度 学生評価委員会 報告書

目白大学

目次

1. 本学の内部質保証と学生評価委員会について（趣旨）	2
2. 第3期学生評価委員会委員	3
3. 学生評価委員会の設置、役割について（関連規程）	3
4. 2025年度学生評価委員会活動概要	4
5. 事前活動	4
5-1. アンケート概要	4
5-2. テーマの確定	4
6. 新宿キャンパス委員会会議	5
6-1. 会議概要	5
6-2. 会議の流れ	5
6-3. 【テーマ】「学生の学びの視点から考える、PC・AIを活用した授業改善」（提案まとめ） ..	5
6-3-1. PCを活用した学びへの提案	5
6-3-2. AIを活用した学びへの提案	7
6-4. 学生の提案によせて	9
6-5. 新宿キャンパス当日の様子	9
7. さいたま岩槻キャンパス委員会会議	10
7-1. 会議概要	10
7-2. 会議の流れ	10
7-3. 【テーマ】「学生の学びの視点から考える、PC・AIを活用した授業改善」（提案まとめ） ..	10
7-3-1. PCを活用した学びへの提案	11
7-3-2. AIを活用した学びへの提案	12
7-4. 学生の提案によせて	13
7-5. さいたま岩槻キャンパス当日の様子	14
8. 今後の対応について	14
9. 【総括】2025年度学生評価委員会の活動によせて	15

1. 本学の内部質保証と学生評価委員会について（趣旨）

本学の「教育の質の保証」については、1994年の開学当時より、体制を整備し、高等教育機関として質の向上に努めて参りました。2006年4月には、目白大学・目白大学短期大学部における自己点検・評価及び第三者評価等に関する規則を制定し、自己点検・評価等実施部会、第三者評価結果等検証部会及び短期大学部自己点検・評価等部会を設置し、組織的な教育活動の自己点検の体制強化を行いました。

2020年4月には、当該規則の改正、並びに目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程を新たに制定し、上記3部会を統合して、学長のリーダーシップのもと、評価・改善等を策定する委員会として、『内部質保証委員会』を設置し、大学における自主的な質保証への取組（内部質保証）体制を整えました。

『学生評価委員会』は、2023年4月に改正した「目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程」第4条3及び第11条により、在学生から意見を得ながら、教育活動等の充実と向上、改善を促進するために設置された組織であり、本学の内部質保証体制の強化と学生が大学での学びにより自らが成長を実感する場＝「学修者本位の大学」の創出を目的としています。

内部質保証推進体制（関連規程）

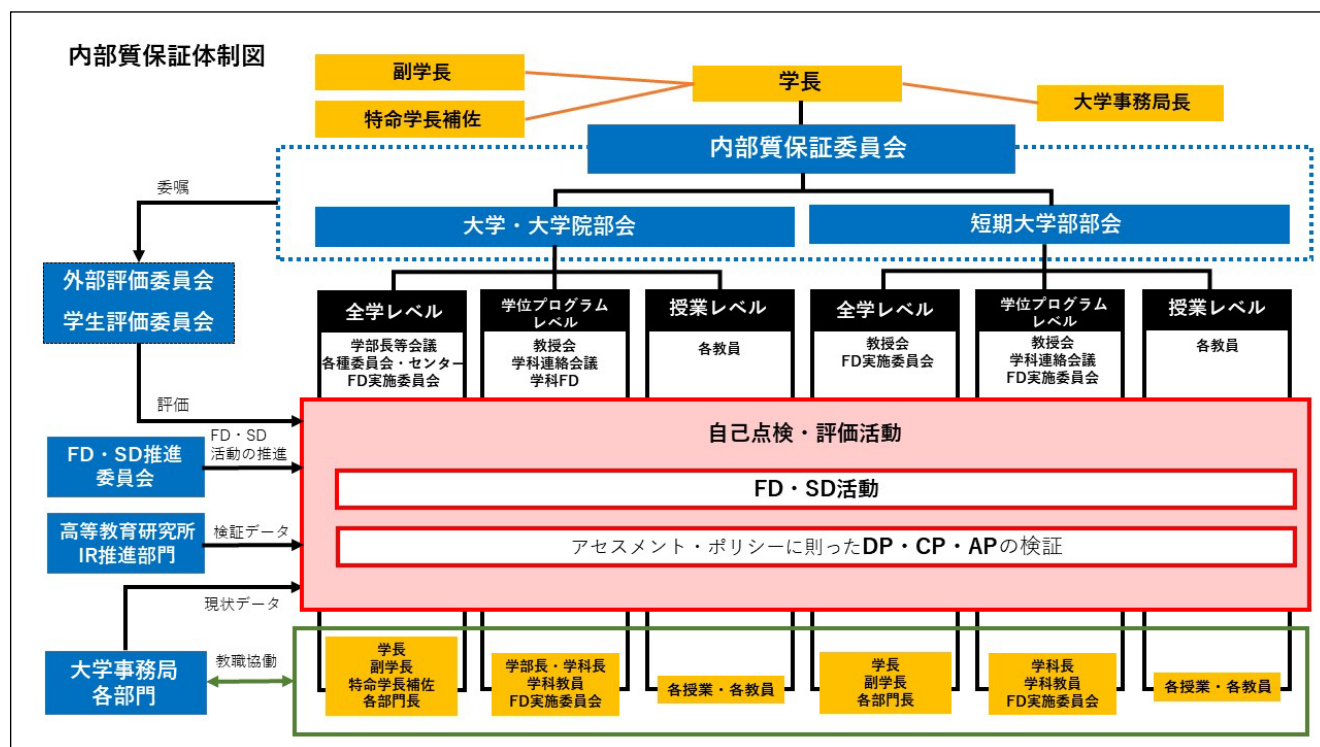
（目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程第4条）

（推進体制）

第4条 学長は、前条に定める方針に従い内部質保証を推進するため、以下の組織を置く。

- （1）大学全体として内部質保証の推進に責任を負う組織として内部質保証委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
- （2）自己点検・評価活動に基づく全学的な観点からの改善を推進するため、本委員会に部会を置く。
- （3）本学の内部質保証について、本学関係者及び外部有識者から意見を得ながら、教育研究活動等の充実と向上、改善を進めるため、外部評価委員会及び、学生評価委員会を置く。

図）目白大学内部質保証の体制図



2. 第3期学生評価委員会委員

委員の選出にあたっては、各学科からの推薦と新宿キャンパスは学生課からの推薦を受け、学長より委員として委嘱された。

■新宿キャンパス

学科	人数
心理カウンセリング学科	2名
人間福祉学科	4名
子ども学科	3名
児童教育学科	4名
社会情報学科	3名
地域社会学科	4名
メディア学科	2名
経営学科	2名
英米語学科	1名
中国語学科	2名
韓国語学科	2名
日本語・日本語教育学科	2名

学年	人数	男性	女性
1年	12名	4名	8名
2年	12名	5名	7名
3年	7名	2名	5名
合計	31名	11名	20名

以上 31 名

■さいたま岩槻キャンパス

学科	人数
理学療法学科	3名
作業療法学科	3名
言語聴覚学科	5名
看護学科	4名

学年	人数	男性	女性
1年	7名	3名	4名
2年	6名	2名	4名
3年	2名	1名	1名
合計	15名	6名	9名

以上 15 名

3. 学生評価委員会の設置、役割について（関連規程）

（目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程第11条、第14条、第15条）

（外部評価委員会・学生評価委員会）

第11条 外部評価委員会及び学生評価委員会は、次に掲げる各号について、意見を聴取し、改善計画の策定に反映させるために開催する。

- （1）卒業認定・学位授与の方針（DP）、教育課程編成・実施の方針（CP）、入学者の受け入れの方針（AP）の各方針に基づく教育活動の評価及び改善に関する事項
- （2）その他本学の教育研究活動等全般に関する事項

（学生評価委員会の構成等）

第14条 学生評価委員会は、本学に在学する学生若干名で構成する。

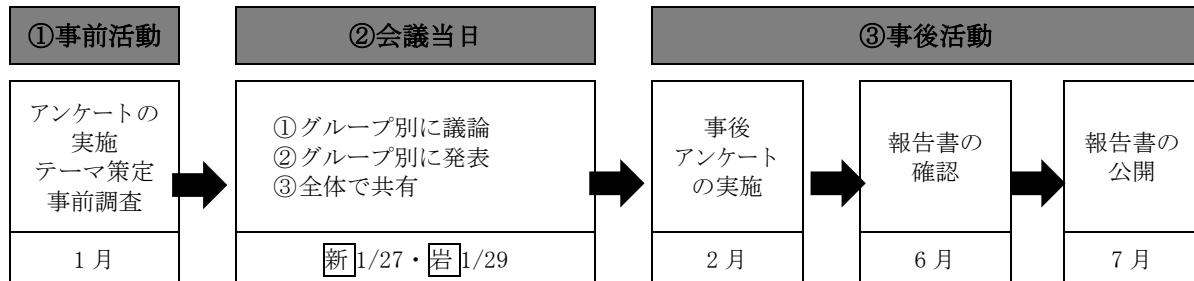
- 2 委員は学科もしくは大学事務局からの推薦に基づき、学長が委嘱する。
- 3 学生評価委員会に委員長を置き、学長が指名する。
- 4 委員会には、学長が必要と認めるときは、委員以外の者を陪席させることができる。
- 5 意見の聴取にあたっては、委員会を開催する。ただし、個別に意見聴取を行うことをもって、委員会を開催したとみなすことができる。
- 6 学生評価委員会の庶務は、大学事務局大学企画室が行う。

（学生評価委員の任期）

第15条 学生評価委員は、開催する委員会ごとに選任する。

4. 2025 年度学生評価委員会活動概要

学生評価委員会は、①事前活動でテーマに関するアンケート調査、②対面でグループ別にテーマに沿った各自の意見、提案のアイデアを出し合った後に、まずグループ内で学内関係者への発表と質疑応答を行った。その後、グループごとに最終提案をまとめ、全体で発表し共有した。③事後活動はアンケートにより補足意見を回収し、報告書（暫定版）としてまとめた後、「報告書」（最終版）と大学からの「回答書」を学生評価委員及び全学生へフィードバックした。以下、活動の概要である。



5. 事前活動

学生評価委員会では、事前にアンケートを行い、結果からテーマを絞り込むこととした。事前アンケート概要は以下の通りである。

5-1. アンケート概要

1) PC の活用について【キャンパス共通】

<質問>

- ① 対面授業で、持参した自分の PC を活用した授業は 1 週間で何科目ありますか
- ② 持参した PC を活用した対面授業で、とても良い内容だった授業はありますか？差し支えなければ科目名と科目担当者を教えてください
- ③ 上記は、どのような授業でしたか
例えば、PC の使い方、学びが深まった理由、他の授業でも取り入れてほしい点などを記入してください

2) AI の活用について【キャンパス共通】

<質問>

- ① これまで、AI を自習で活用したことがありますか（高校時代含める）
- ② 学習（授業、予習、復習、自習含める）のどのような場面で AI を活用していますか
- ③ これまでに活用したことのある AI ツールがあれば教えてください
- ④ 共通科目について
現在の大学での学び（授業、予習・復習、課題・レポート作成等）において、AI は学習の質を高めるために活用できると思いますか
- ⑤ 上記共通科目で、そう思う理由（活用できそう、または難しそう）とを感じる学習場面があれば教えてください
- ⑥ 専門科目について
現在の大学での学び（授業、予習・復習、課題・レポート作成等）において、AI は学習の質を高めるために活用できると思いますか
- ⑦ 上記専門科目で、そう思う理由（活用できそう、または難しそう）とを感じる学習場面があれば教えてください
- ⑧ PC や AI を活用した学びについて、期待している点や、気になる点・不安に感じる点があれば教えてください
- ⑨ AI の活用について学ぶ授業が開講された場合、受講してみたいと思いますか

5-2. テーマの確定

各キャンパスのアンケート結果を基に、ICT 機器（特に PC）ならびに AI の活用について

- ・学生の学習実態や意識の把握
- ・授業における効果や課題の整理
- ・学生の主体的な学修および質向上に資する PC・AI 活用のあり方

等の検討に活用し、今後の授業改善に向けた提案を目的として委員会を開催した。

6. 新宿キャンパス委員会会議

6-1. 会議概要

■新宿キャンパス

開催日	2026 年 1 月 27 日（火）
時間	10：00～15：30
場所	目白大学新宿 8 号館地下 1 階 08A00 番教室
学生評価委員出席者	学生 28 名
大学出席者	学長、副学長、特命学長補佐、学務部長（教務担当）、事務局長、教務部長（計 10 名）
ファシリテーター サポート等	高等教育研究所スタッフ、大学企画室スタッフ（計 9 名）

6-2. 会議の流れ

冒頭、前回の委員会の改善提案について土井副学長より状況の報告があった。

続いて、学生を 5～6 名で構成する 5 つのグループに編成した。多くの学生が互いに初対面であったため、アイスブレイクを通じてコミュニケーションを図った後、議論に入った。午前中は学生視点での ICT 機器（特に PC）や AI の活用に関する学修実態や意識をグループ内で共有しつつ意見交換を行い、教育課題や改善提案をまとめた。

午後のグループセッションでは、大学側関係者が各グループに加わり、学生の提案に対し、教員からも見解や補足的な意見が示され、双方向的な議論が展開された。

最後に全体発表の場において、各グループ 5 分で発表を行い、議論の成果ならびに提案内容を共有するとともに、大学側代表者より現時点での対応方針や検討状況の説明が行われた。

6-3. 【テーマ】「学生の学びの視点から考える、PC・AI を活用した授業改善」（提案まとめ）

学生評価委員によるグループ内発表、最終発表、事後アンケートの内容をもとに、本テーマ「PC・AI を活用した授業改善」に関する学生意見を整理・統合した。いずれも PC・AI は「使うこと」が主目的ではなく、学修効果が高まる形での PC・AI の利活用に対する期待とともに、授業における運用上の課題や学科、教員ごとの活用方法の差、大学としての方針整備を求める意見が数多く寄せられた。一方で、全てをデジタル化するのではなく、デジタルとアナログのメリットを活かした使い分けを希望する声もあった。

本まとめでは、学生の意見を「PC を活用した授業改善」「AI を活用した学びと課題」「授業運営・学修支援体制への提案」「大学全体として求められる方針・環境整備」の 4 つの観点から整理し、報告する。

6-3-1. PC を活用した学びへの提案

1) 本学の現状と課題

■PC 活用の実態

レポート作成、プレゼン資料の作成、授業資料閲覧など、PC が日常的な学習ツールとして定着しているとの意見が多く挙げられた。一方で、授業や学科によって PC 利用頻度に差があり、十分活用されていない授業も存在するとの指摘があった。

＜主な意見（学生の声）＞

- ・プレゼン資料の作成やレポート作成では PC が不可欠
- ・画面分割によって資料閲覧とメモ作業を同時に行える
- ・PDF 資料への書き込みやデータ保存が便利
- ・履修登録時点で PC 使用有無が分かると授業選択の参考になる
- ・紙資料の印刷コスト削減やペーパーレス化につながる
- ・就職後を見据えると PC スキル習得は重要
- ・授業によってはスマホだけでも十分対応できる場合がある
- ・学科によって PC 使用頻度に大きな差がある

■PC 活用に関する課題

PC 活用については、利便性が高く評価される一方で、「重さ」「充電」「授業ごとの運用差」「システムの不統一」など、学生負担に関する課題が多く挙げられた。

＜主な意見（学生の声）＞

(1)PC 利用ルールや運用の不統一

- ・ Google Classroom と SchooSwing の使い分けが教員ごとに異なる
- ・ 同一授業内でも配信媒体が統一されていない
- ・ 教員によって授業運営や資料提示方法に差がある

(2)PC 持参負担への課題

- ・ PC 本体や充電器が重い
- ・ 充電不足への不安が大きい
- ・ PC を持参しても、使用しない授業がある

(3)デジタル前提と紙前提が混在している

- ・ 授業では PC 活用を求められる一方、試験では PC 持込不可の場合がある
- ・ デジタル資料を配布しながら印刷資料の持参を求める授業もある
- ・ 紙とデジタル双方の運用方針が曖昧

2) PC 活用に関する授業運営・学修支援への提案

①PC 利用に関する事前情報の明示

提案：シラバス等で、PC 使用の有無・目的・必要機能を明示する

理由（学生の声）：

- ・ PC が必要な授業か事前に分かるようにしてほしい
- ・ 履修登録時点で PC 使用有無が分かると授業選択の参考になる
- ・ 「なぜ PC を使用するのか」を説明することで納得感につながる

② PC を活用した双方向型授業の推進

提案：クイズ機能やリアルタイム回答機能等を活用し、双方向型授業を増やす

理由（学生の声）：

- ・ 匿名回答型の授業は参加しやすい（意見が言いやすい）
- ・ 理解度チェックがあると集中できる
- ・ 他者の意見が見えると学びが深まる

③PC を活用した参加型授業の推進

提案：オンラインや対面でも、クイズ、匿名回答を活用して、グループワーク、ディスカッションに主体的参加を促す

理由（学生の声）

- ・ オンライン授業は一方向授業より参加型授業の方が集中できる
- ・ オンライン機能を交流促進に活用してほしい
- ・ 対面で学ぶ価値を大切にしたいので、対面授業で PC を活用する授業を増やす

④学修段階に応じた PC 教育

提案：1 年次だけでなく、2 年次以降も継続的に PC スキルを学べる機会を設ける

理由（学生の声）：

- ・ 学科や進路（就職）に応じた PC 活用を学びたい
- ・ レベル別授業や基礎から学べる仕組みが必要
- ・ 質問や相談に対応できる教員体制を整えてほしい

3) PC 活用に関する大学全体の方針への提案

①学修支援システムの運用ルールの一

提案：授業で利用する学修支援システムの運用ルールを整理し、学生が混乱しない環境の整備
理由（学生の声）：

- ・ Google Classroom と SchooSwing が混在していて分かりにくい
- ・ 同じ授業内でも配信媒体が変わることがあり混乱する
- ・ システムの特性に応じた使い分けは理解できるが、学生側への配慮が必要

②学内 ICT インフラの整備

提案：Wi-Fi 環境や充電設備等の学内インフラを改善する

理由（学生の声）：

- ・ Wi-Fi が不安定な場所がある
- ・ コンセントや充電設備の不足
- ・ PC 利用前提なら環境整備も必要

6-3-2. AI を活用した学びへの提案

1) 本学の現状と懸念

■AI 活用の実態

学生からは、生成 AI を「情報収集」「論文要約」「レポート構成」「文章添削」「翻訳」「アイデア整理」など、多様な目的で活用している実態が共有された。特に、学習効率化や時短への期待は大きく、多くの学生が日常的に AI を利用している状況が確認された。

<主な意見（学生の声）>

- ・ 論文や資料の要約、添削に活用している
- ・ レポート構成の提案に活用している
- ・ 文章校正に活用している
- ・ 翻訳や語学学習に活用している
- ・ アイデア出しに活用している
- ・ 課題内容に対する視点整理に活用している
- ・ 自習や復習問題作成に活用している

■AI 活用に対する懸念

AI 活用については利便性が高く評価される一方、「思考力低下」「評価の公平性」「AI 利用基準の不明確さ」などに対する不安が多く挙げられた。

<主な意見（学生の声）>

(1)思考力・文章力低下への不安

- ・ AI に頼りすぎると自分で考えなくなる
- ・ 文章構成力や国語力が低下する
- ・ 文献調査能力が身につかない

(2)評価の公平性への不安

- ・ 自力で書いた学生より AI 活用学生の評価が高い場合がある
- ・ AI を使っていないのに「AI を使った」と疑われるケースがある
- ・ AI チェッカーの精度が不透明

(3)教員間での対応差

- ・ 教員によって AI への考え方が異なる
- ・ 授業ごとの基準が曖昧
- ・ AI 活用可否が明示されていない

(4) AI 情報の信頼性

- ・ AI の回答には誤情報も含まれることを前提に、正誤判断には基礎知識が必要
- ・ AI の意見（情報）＝自分の意見としないよう、自分で考える力が重要

2) AI 活用に関する授業運営・学修支援への提案

① AI リテラシー教育の導入

提案：学生・教員双方に対し、AI リテラシー教育や研修機会の整備

理由（学生の声）：

- ・ AI の正しい使い方を学びたい
- ・ プロンプトの作り方を知りたい
- ・ AI のメリット・デメリットを理解したい
- ・ 教員も AI を理解してほしい

② AI 活用を前提とした授業・評価方法への転換

提案：AI 利用を禁止するのではなく、「AI を活用したうえで何を考えたか」を評価する授業設計への転換

理由（学生の声）

- ・ AI 時代を前提とした教育が必要
- ・ 独自性や考察を重視してほしい
- ・ AI を活用しながら自分の意見を形成したい

③ 同一科目における授業運営の統一

提案：同一科目における授業進行、内容、課題、資料提示、評価基準等の統一を図る

理由（学生の声）

- ・ 情報活用演習が教員によって内容や難易度、進め方に差がある（統一してほしい）

④ 学修目的・評価基準の明確化

提案：授業の目的や評価観点を明示し、学生が安心して学べる環境の整備

理由（学生の声）

- ・ AI 利用時の評価観点を示してほしい
- ・ AI を使っていることを前提に、さらに高いレベルでの課題設定、評価をすべき

3) AI 活用に関する大学全体の方針への提案

① 大学としての AI 方針整備

提案：大学全体として、AI 活用に関する基本方針・最低基準を策定する

理由（学生の声）：

- ・ 大学としての考えを共有してほしい
- ・ 最低限の共通認識（学生・教員）が必要

② AI 活用基準の明確化

提案：大学全体および授業単位で、AI 利用ルールや評価基準を示す

理由（学生の声）

- ・ AI をどこまで使って良いのか（大学全体、各授業）明示してほしい
- ・ 何が減点対象になるのか基準を示してほしい

③ 教員研修（AI の理解を深める、活用する研修）の充実

提案：教員向けの AI・ICT 研修や授業改善事例共有の推進

理由（学生の声）

- ・ 教員の AI 理解不足を感じる
- ・ AI 利用を前提とした授業改善が必要

④大学で学ぶことの意味の再定義

提案：デジタル化の発展とともに、大学で（対面で）学ぶことの意味が変化しているが、対面で学ぶことの良さ、友人と共に学ぶことの意義の再定義

理由（学生の声）

- ・大学は個人でできないことを共に考え、実践する場である
- ・同じ場所（空間）で一緒に学んでいることの実感や達成感はオンラインでは得られない
- ・通学することで、生活リズムが維持できる

⑤AI と人間の学びのバランス

提案：AI 活用と、自分で調べ・考え・表現する学びの両立を重視する

理由（学生の声）：

- ・AI に「使われる」のではなく「使いこなしたい」
- ・最終的には自分の考えとして説明できる力を育成する必要がある
- ・AI を活用しながらも、情報の根拠を確かめ、自分で考え、判断する力が重要

6－4．学生の提案によせて

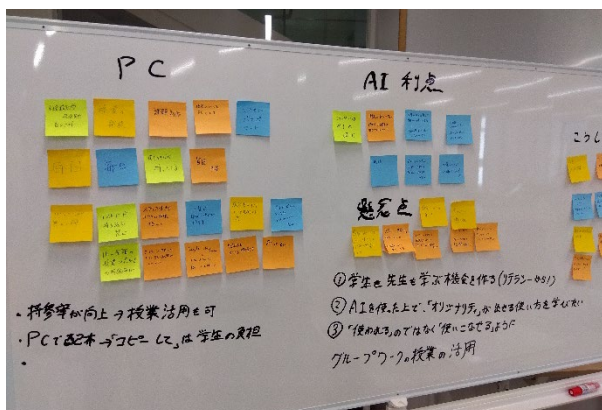
副学長 石川 正憲

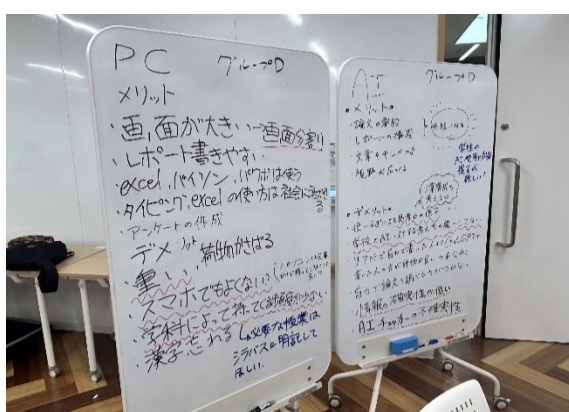
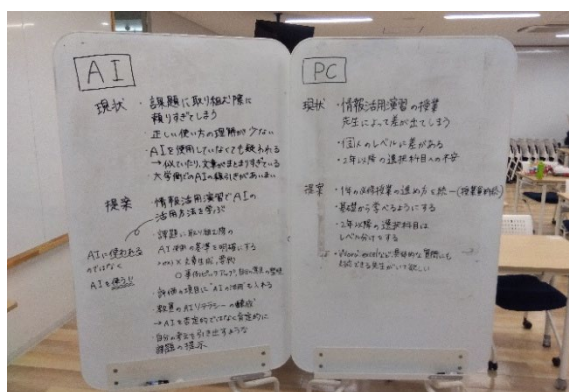
今年も代表学生の皆さんには、本学の授業について真剣に議論していただき、学修者の視点から具体的な課題と改善提案をいただきました。

PC 利用については、授業ごとに使用の有無や目的が分かりにくいこと、Google Classroom と SchooSwing 等の使い分けが統一されていないこと、Wi-Fi や充電設備などの学内インフラに不安があることが指摘されました。これに対し、大学としては、シラバス等で PC 利用の有無、使用目的、必要機能等を明示し、学生が履修段階で準備しやすい環境を整えていきます。また、LMS の運用についても、すべてを一律に統一するのではなく、授業内で使用するシステムの役割分担や、連絡・課題提出の場所を明確にし、学生が混乱しないよう対応します。

AI 利用については、学生から、AI の適切な使い方を学びたいという前向きな意見とともに、思考力・文章力の低下、評価の公平性、教員間の対応差、AI チェッカーへの不安が示されました。大学としては、AI を一律に禁止するのではなく、学修目標に応じて活用範囲を明確にし、AI を利用した場合の申告方法や評価基準を授業ごとに示していきます。特に、AI 判定ツールのみで不正と判断しないこと、AI の出力をそのまま提出するのではなく、根拠を確認し、自分の考えとして説明できる力を重視することを、大学として明確に打ち出していきます。今後は、学生・教員双方の AI リテラシー教育を進めるとともに、大学全体の基本方針を整備し、技術の変化に応じて継続的に見直していきます。

6－5．新宿キャンパス当日の様子





7. さいたま岩槻キャンパス委員会会議

7-1. 会議概要

■さいたま岩槻キャンパス

開催日	2026年1月29日(木)
時間	10:00~15:30
場所	目白大学さいたま岩槻キャンパス5号館B206b番教室
学生評価委員出席者	学生14名
大学出席者	学長、副学長、特命学長補佐、保健医療学部長、学長補佐(教務委員)、事務局長、事務局次長、学修支援部長、教務課長(計11名)
ファシリテーター サポート等	高等教育研究所スタッフ、大学企画室スタッフ(計7名)

7-2. 会議の流れ

冒頭、前回の委員会の改善提案について堤副学長より状況の報告があった。

続いて、学生を5名で構成する5つのグループに編成した。多くの学生が互いに初対面であったため、アイスブレイクを通じてコミュニケーションを図った後、議論に入った。午前中は学生視点でのICT機器(特にPC)やAIの活用に関する学修実態や意識をグループ内で共有しつつ意見交換を行い、教育課題や改善提案をまとめた。

午後のグループセッションでは、大学側関係者が各グループに加わり、学生の提案に対し、教員からも見解や補足的な意見が示され、双方向的な議論が展開された。

最後に全体発表の場において、各グループ5分で発表を行い、議論の成果ならびに提案内容を共有するとともに、大学側代表者より現時点での対応方針や検討状況の説明が行われた。

7-3. 【テーマ】「学生の学びの視点から考える、PC・AIを活用した授業改善」(提案まとめ)

学生評価委員によるグループ内発表、最終発表、事後アンケートの内容をもとに、本テーマ「PC・AIを活用した授業改善」に関する学生意見を整理し、まとめた。

各グループからは、PC・AIの活用による学習効率化や利便性への期待が示される一方で、授業による活用頻度の差や設備面の課題、AI利用に関するルールや評価基準の不明確さなど、多様な意見が寄せられた。

特にさいたま岩槻キャンパスでは、医療専門職を目指す学生の立場から、「AIを活用しながらも、自ら考え判断する力を維持すること」の重要性を重視する意見が多く見られた。

本まとめでは、学生の意見を「PCを活用した授業改善」「AIを活用した学びと課題」の2つの観点から整理し、報告する。

7-3-1. PCを活用した学びへの提案

1) 本学の現状と課題

■PC活用の実態

学生からは、PCやタブレットがレポート作成、資料管理、課題提出、情報共有などにおいて有効であり、学習効率向上につながっているとの意見が多く挙げられた。

＜主な意見（学生の声）＞

- ・PCの活用はグループワークや課題提出が円滑に進む
- ・PCの活用はレポート作成や資料共有がしやすい
- ・学科によってPC利用頻度に差がある
- ・PCやタブレットでは資料管理がしやすい

■PC活用の課題

一方で、学科や授業による利用頻度の差、充電環境やWi-Fiなど設備面の不足、授業内容や情報教育の統一性に関する課題も指摘された。デジタルと紙媒体それぞれの利点を活かした「ハイブリッド型」の授業運営を求める声も多く見られた。

＜主な意見（学生の声）＞

- ・学科によってPC利用頻度に差がある
- ・学生は現場でどの程度PCスキルが必要か分からない
- ・学生にも「紙派」と「デジタル派」が存在する
- ・PCを使う意味や必要性を知ることによって学習意欲につながる
- ・デジタルのみでは、身体的影響（集中力低下、眼精疲労等）が出る

2) PC活用に関する授業運営・学修支援への提案

①PCを活用した授業機会の充実と活用目的の明確化

提案：1年次からPCを積極的に活用する授業を増やすとともに、PC利用の目的や必要性を学生へ明確に示す

理由（学生の声）：

- ・医療現場や就職後に必要となるPCスキルを身につけたい
- ・学生は現場でどの程度PCスキルが必要か分からない
- ・PCを使う意味や必要性を知ることによって学習意欲につながる
- ・履修時や学期初めにPC使用頻度を説明してほしい

②デジタルと紙媒体を活かした授業運営

提案：デジタル教材と紙資料の双方を活用し、学習内容や目的に応じて使い分ける授業運営の実施

理由（学生の声）

- ・カラー資料や図表はデジタルの方が見やすい
- ・覚える学習や国試対策は紙資料の方が学習しやすい
- ・紙資料は全体像を把握しやすい
- ・ペーパーレス化を進めつつ、学習効果とのバランスも必要

③情報教育の授業内容の統一とレベル別対応

提案：情報系授業の内容や進行方法を整理・統一するとともに、学生の習熟度に応じた学修支援体制の整備

理由（学生の声）

- ・情報系の授業について、教員によって授業内容や難易度に差がある
- ・Word、Excel、PowerPoint など実践的スキルを学びたい
- ・高校での PC 経験に差がある
- ・タイピング速度や PC リテラシーの個人差が大きい
- ・レベル別授業や補習的な支援をしてほしい

3) PC 活用に関する大学全体の方針への提案

①学内 ICT インフラと学習スペースの環境整備

提案：Wi-Fi 環境、充電設備、自習スペースなど、PC 活用を支える学習環境の整備

理由（学生の声）：

- ・Wi-Fi が届きにくい場所がある
- ・PC の充電不足への不安が大きい
- ・モバイル充電器貸出やコンセント増設を希望する声がある
- ・学食等でも学習できる環境がほしい
- ・静かな空間と交流可能な空間の両方を求める学生がいる
- ・PC とタブレットを両方持参することが負担となっている
- ・印刷枚数の上限（年間 100 枚）の見直し

7-3-2. AI を活用した学びへの提案

1) 本学の現状と懸念

■AI 活用の実態

学生からは生成 AI を要約、文章作成補助、アイデア整理、語彙提案などに活用している実態が共有された。さらに AI による学習効率向上への期待があった。

<主な意見（学生の声）>

- ・上手く言語化出来ない時に AI が自分の考えていることを言語化してくれる
- ・調べたこと以外にも多くの情報を得ることが出来る
- ・文献要約、翻訳に活用して作業効率を上げている
- ・発表する原稿を作ってもらった
- ・考えの広がりや深化、思考の補いができる

■AI 活用に対する懸念

AI 活用については利便性が高く評価される一方、「考える力」の低下や、AI 使用の評価の公平性・評価基準への不安も多く挙げられた。特に医療専門職者として、臨床等の現場においては、その場で判断・説明をしなければならないケース（AI に頼れない場面）が多々あることから、「AI を使いこなしつつも、自分で判断し説明できる力」の必要性を重視する意見が目立った。

<主な意見（学生の声）>

(1) 考える力の低下への不安

- ・信用性、正確性が低い
- ・AI に頼りすぎると自分で考えなくなる
- ・文章構成力や語彙力、国語力が低下する
- ・AI を使いこなせていない

(2) 臨床場面での判断力低下

- ・現場で AI を使うことはできない
- ・医療食として自分で考えることが重要である
- ・正解のない「医療」の現場で、使いこなせるようにならないといけない

(3) 教員間での対応差

- ・教員によって AI 使用の評価基準が異なる

2) AI 活用に關する授業運営・学修支援への提案

①AI を活用した主体的な学びの推進

提案：AI を単なる時短ツールとしてではなく、自分で考え、判断し、説明する力を育てるために活用する授業の展開

理由（学生の声）：

- ・AI のメリットを生かし、自分で判断する補助策として活用することが重要
- ・医療現場では最終的に自分で判断する力が必要
- ・「AI に支配される」のではなく、「AI を使いこなす」姿勢が重要
- ・AI を活用しても、自分の言葉で説明できる必要がある

②AI リテラシー教育と適切な活用方法の学習

提案：学生・教員双方に対し、AI の正しい使い方やリテラシーを学ぶ機会を設ける

理由（学生の声）：

- ・AI を使いこなせていない学生が多い
- ・AI の利点・欠点を理解したい
- ・AI の使い方次第で学習効果が変わる
- ・さまざまな AI の特徴や種類について授業で学びたい

3) AI 活用に關する大学全体の方針への提案

①AI 活用ルール・評価基準の明確化

提案：大学および授業単位で、AI 利用のルールや評価基準を明示する

理由（学生の声）：

- ・どこまで AI を使って良いのか分からない
- ・AI を使っていないのに疑われるケースがある
- ・AI 利用による不公平感がある
- ・科目ごとに AI 活用基準を示してほしい
- ・レポート等での「AI 未使用」の証明が難しい

②AI 利用基準の明確化と教員の AI スキル向上

提案：AI 利用ルールの標準化と AI の理解促進

理由（学生の声）：

- ・教員によって AI への考え方や運用方針が異なる
- ・教員間で AI 利用方針に差がある
- ・教員側の AI 理解やスキル向上も必要

7-4. 学生の提案によせて

副学長 野沢 桂子

学習環境や情報教育、AI の活用などについて、多くの貴重なご意見・ご提案をいただきました。学生の皆さんが日頃の学びを真剣に考えてくださったことに心より感謝いたします。

医療現場では電子カルテが日常的に利用されており、また、技術革新の著しい医療分野では、生涯にわたって新しい知識や技術を学び続けることが求められます。そのため、PC スキルや情報活用能力は医療職にとって不可欠な力となっています。2022 年度から高校で「情報 I」が必修となったことも踏まえ、大学としても情報教育の内容や進め方を見直し、学生の習熟度に配慮した支援体制の充実に取り組んでいきます。

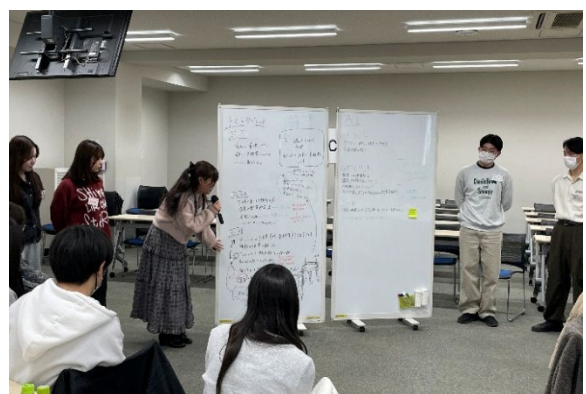
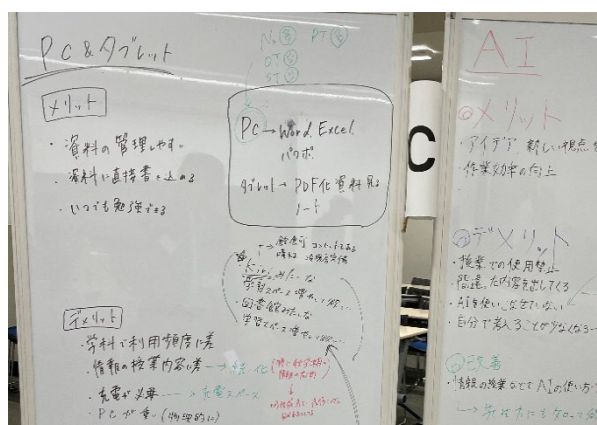
また、AI の急速な普及に伴い、AI を適切に活用する力と、自ら考え、判断し、説明する力の双方を育成することが重要になっています。今後は、学生への AI リテラシー教育を充実させるとともに、教

職員研修を通じて大学全体の AI 利用方針を整備し、各授業における AI 利用の考え方についても明確化を進めていきます。

さらに、デジタル教材と紙資料の活用方法、通信環境、PC 利用環境、自習スペースなどの学習環境についても改善を進めています。皆さんからの意見をもとに、教材の適切な選択や学習環境の整備を継続していきます。

今後も、学生の皆さんから寄せられる意見を教育改善の重要な手がかりとして受け止め、よりよい学習環境と教育内容の実現に努めてまいります。一緒によりよい大学を築いていきましょう。

7-5. さいたま岩槻キャンパス当日の様子



8. 今後の対応について

今回の大学への提案に対して、大学は回答及び具体策を検討し、大学学長及び副学長から回答書を学生評価委員会構成員への報告並びに全学生へ学生ネットサービス（学内イントラネット）で周知する。

9.【総括】2025 年度学生評価委員会の活動によせて

学長 今野 裕之

学生評価委員会は、学生のみなさんの声を直接、教育改善に活かしていく貴重な機会です。今年度も、多くの学生の皆さんに学生評価委員として参加いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

2025 年度は、「学生の学びの視点から考える、PC・AI を活用した授業改善」をテーマに、新宿キャンパス・さいたま岩槻キャンパスのそれぞれで、事前アンケートなどをもとに活発な議論をしていただきました。その結果、PC や AI を学修にどう活かすかという具体的な活用場面の報告、運用上の課題、授業での評価のあり方、大学としての方針整備を求める声など、多くの役立つ提案をしていただきました。

とりわけ印象的であったのは、AI を単なる効率化の道具としてではなく、自らの学びを深める手段として捉える姿勢でした。AI を活用しながらも、最後は自分で考え、自分の言葉で説明できる力を大切にしたいという皆さんの言葉は、これからの大学教育が拠って立つべき原点を示すものと受け止めています。同時に、授業科目における AI 活用の可否の明示や評価基準の明確化、教員・科目間の運用差の是正、ICT 環境の整備など、大学が取り組むべき課題も具体的に指摘していただきました。一方で、思考力の低下や評価の公平性への不安の声もありました。新しい技術は、期待とともに戸惑いを伴います。大学としては、ルールや評価の考え方を明確に示すとともに、対面で、仲間とともに学ぶことの意義を、より丁寧に伝えていく必要があると改めて感じました。

昨年度に引き続き、本委員会が、意見を聴取する場にとどまらず、学生と大学がともに次の学びを創り出す場であることを実感いたしました。皆さんの真摯な取り組みに敬意を表するとともに、いただいた提案を確かな教育改善へとつなげてまいります。次年度の委員会が、さらに実り豊かな対話の場となることを期待しております。

以上